

大学生における知恵のイメージについて

筑波大学大学院(博)心理学研究科 盧 怡慧

筑波大学心理学系 杉原 一昭

The Notion of Wisdom among College Students

I-Huey Lu and Kazuaki Sugihara (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

To understand how people think about wisdom, a study was undertaken to investigate what kind of implicit theories people have regarding wisdom. 135 college students were asked to name a "wise person" he or she knows and to describe this person freely. 84 items of "impressions about the wise person" were collected, and 64 of them were used as items on an image questionnaire. According to a factor analysis, 5 factors were found to be important to the notion of wisdom. 1) Judgement in problem solving and judgement of people 2) Strong confidence in self and purpose of life 3) Attitude regarding flexibility and objectivity 4) Empathy toward others and good communication ability 5) Skill in use of knowledge in daily life. The results showed that other items such as leadership and the richness of knowledge were of less importances for the notion of wisdom.

Key words: Wisdom, implicit theory, college students.

問 題

心理学における知恵研究は1980年頃から、高齢者の特性への関心の高まりとともに、少しずつ行われ始めた。それらの研究は、3つに分けられる。第一はさまざまな人たちの「暗黙な知恵観」を調べることによって、「知恵」の概念を明らかにすることを目的とする研究である。第二は知恵の認知理論である。一番代表的なのはBaltesの研究であり、かれは知恵を「人生の困難だが不確実な事についての良い判断と忠告をなす能力」と定義して、知恵を人生の基本的な実践の専門家的な知識とみなし、いろいろな研究を進めてきた。第三は知恵を知能の延長ではなく、パーソナリティとの関係を中心に研究している。つまり、第三類の知恵研究の研究者たちは、知恵は認知だけではなく、人格にも依存していると示唆していた。本研究は第一類の問題を中心に検討し、人々の知恵についてのイメージから、知恵の概

念や要素を明らかにすることを目的とする。

常識的な知恵の概念はとても曖昧であり、人や文化によって異なっている。例えば、辞書によれば、知恵は「生き方やふるまいに関する問題に対し、適切に判断する能力；目的と手段を選択する際の判断の適切さ」(オックスフォード大辞典, 1933), 「物事の理を悟り、適切に処理する能力」(広辞苑 第四版, 1991)などと定義される。しかし、1980年以来、知恵は常識ではなく、心理学的な概念として研究されてきた。たとえば、Holidayら(1986)はさまざまな人に「賢明な人」の特徴を書かせたところ、次のような5つの因子が得られた。

- 1) 経験に基づく優れた判断力。この項目は広い範囲に渡って物事を見る、自己理解、経験から学ぶ、常識が使えるなどを含んでいた。
- 2) 日常の出来事の処理についての判断力、及び、コミュニケーション能力。ここでは人生の理解、聴く価値があること、結果の重視、良い忠

告の来源などを含んでいる。

- 3) 一般的なコンピテンス. この項目には注意深い, 鋭敏さ, 知能の優秀, 創造的, 教養があるなどを含む。
- 4) 対人技能. たとえば, 公平で, 感受性があり, 社交的で, 親切であることなどを含んでいる。
- 5) 社交的融通. 分別があり, 判断を控え, 平静であることなどを含む。

彼らの5つの因子の結果から, 知恵は知能よりもはるかに広い豊かな概念であることが明らかにされた。そこで, 第2因子の「日常の出来事の処理についての判断力, 及び, コミュニケーション能力」がとくに重要であると指摘された。また, Baltes (1990)の研究も日常事の処理能力あるいは忠告能力が知恵の中心的な能力であると提示していた。以上の先行研究から見れば, 日常的な解決力や判断力と忠告する能力は「知恵」の概念に重要であることが, 多くの研究者の間に一致していることが示された。

また, Baltes (1990)は知恵を「人生の基本的な実践の専門家的な知識」と定義して, 知恵を問題解決や忠告する能力とみなしている。実際に, 成人に人生の難しいジレンマ課題を提示し, 忠告を求めた。さらに, 回答は以下のような5つのオリジナルな知恵指標によって評定された。1) 豊かな経験から得た事実に基づく知識。2) 豊かな手続的な知識。3) ライフスパンについての豊かな知識。4) 不確実性への理解。5) 価値相対論であった。それらの5つは知恵を評定するための指標であり, Baltesらの観点においては, 知恵の欠かせない要素でもあった。

以上の述べたように, Holiday (1986)らは人々の知恵イメージを明らかにすることを研究の目的としたが, その他の研究者たちは, 年齢やコホートによって, 知恵についての考え方が大きく異なっているという意味深い研究結果を示した。Clayton (1976)は「知恵」概念を明らかにすることを目的にし, 分析を行った。彼は, 知恵と加齢との関係, 知恵と自分との関係を調べるために, “年取った(aged)”及び“自分自身(self)”の2つの記述語を用いて, また, 知恵の概念と関連すると思われる記述語「経験的, 直感的, 内観(内省)的, 実践的, 理解的, 共感的, 知的, 落ち着く, ユーモアがある, 注意深い, 観察, 知覚力の鋭いなどの15項目を用いた。その105対の記述語の問いに対し, 5件法(1:とても似ている~5:全然似ていない)によって, 類似性を調べた。「知恵」という記述語を中心としての空間的な関係図が得られた。図の構造には, コホート差が示された。

その結果を検討したところ, 第一に, 加齢によって, 知恵概念の構造の複雑性が増加する。高齢群では, 4つの主要因子が見られ, 曖昧ではない知恵観が示される。第二に, 高齢者はより感情要因を重視する。第三に, 知恵は感情要因, 内省要因, 認知要因の3次元から構成されていると考えられた。感情要因(affective component)は「理解的, 共感的, 落ち着く」などの記述語を含んでいる。内省要因(reflective component)は直感的, 内観的などの記述語を含み, また, 認知要因(cognition component)は実践, 注意深いなどの記述語を含んでいることが示された。

これらの結果から, Clayton (1976)は, 知恵に対する概念は, 年齢によって異なっていることを示し, そして, 高齢になればなるほど, 知恵に対する概念が複雑になっており, さらに, 知恵の感情要因を重視していると結論づけている。

以上のような西洋の知恵観に対して, 日本における暗黙の知恵観を調べることも必要であると思われる。本研究では, まず, 大学生を対象に, 知恵のイメージについて調べることを目的とした。次に, 大学生における知恵のイメージを分類することを目的とした。そこで, KJ分類法及び因子分析の2つの方法が用いられた。また, 本研究で得られた知恵のイメージを先行研究の結果と比較することによって, 知恵概念の構造を明らかにしたい。

調査1 KJ法による知恵イメージの分類

目的

一般的に, 人々は「知恵」について, どのようなイメージを持っているかを解明するために, 大学生の「知恵のイメージ」についての記述を質問紙により収集する。また, 得られた「知恵のイメージ項目」はさらにKJ法によって, 分類を行う。

方法

質問内容 知恵のイメージについての記述を収集するために, 次のような質問が行われた。

まず, 「あなたの知っている人の中で, 誰が知恵のある人だと思いますか?」あるいは「そのような人がいない場合, 一般的に, 知恵のある人はどんな人だと思いますか?」という質問に回答を求めた。

さらに, 「その理由やその人についての性格, 特徴, 職業, とくに優れているところ, など, 自由に書いて下さい。」という質問に対して自由記述によ

る回答が求められた。

被験者 回答者は茨城県内の大学の学生135名(男子60名, 女子75名)を対象とした。1997年5月に調査を実施した。

KJ法による分類の手続き 予備調査から得られた「知恵のイメージ項目」は、大学生4名及び大学院生4名によって、分類された。すべての分類者の間に合意するまで、協議が行われ、分類が行われた。

結果

合計135名の大学生から得られた知恵者のイメージに関する記述を整理した結果、84項目にまとめられた。さらに、これらの「知恵者のイメージ項目」について、KJ法によって分類したところ、次のような7項目が分類された。1)知識と経験にかかわる項目。ここではさらに知識の活用、時代観及び世界観、経験などの4つに分類された。2)他者の配慮にかかわる項目。ここでは、リーダーシップ、コミュニケーション、他者への受容、他者への供給、他者及び状況への分析力などを含む。3)自己にかかわる項目。ここでは生き方、ポリシー、倫理観及び価値観を含む。4)問題解決能力にかかわる項目。ここではさらに、問題解決能力、メタ認知の2類に分類されることができた。5)向上心。6)学習。7)柔軟的に物事を考えることができること。分類した結果はTable 1で示された。

Table 1 KJ法による「知恵のイメージ」の分類表

(知識と経験)	知識の豊富さ 知識の活用 時代観, 世界観 経験の豊富さ
(他者)	リーダーシップ コミュニケーション能力 他者への受容 他者への供給, 向社会的な行動 他者, 状況の分析力
(自己)	生き方 ポリシー 価値観, 倫理観
(問題解決)	問題解決能力 メタ認知
(向上心)	
(学習)	
(柔軟性)	

調査2 因子分析による知恵イメージの分類

目的

調査1で得られた知恵のイメージ項目を用いて、さらに大学生の知恵に対するイメージの因子分析を行うことを目的とした。

方法

調査対象 茨城県内のT大学の学生124名(男子75名, 女子49名)を対象として1998年7月に調査を実施した。

調査内容 調査1の結果を参考にして、新たな「知恵のイメージについての質問紙」が作成された。全部は64項目であった。すべての項目に、「“知恵”のイメージを思い浮かべてください。次の文章はあなたの持つ「知恵」のイメージにどのくらい近いですか?当てはまるところに○を付けてください。」という指示について、5件法によって(1:とても似ている~5:全然似ていない)、回答を得た。

結果

知恵のイメージの項目について、因子分析を行い、主成分分解を求めてVarimax回転を行った結果、7因子が抽出された。.35以上の因子負荷を有することを条件に項目を選択し、71項目7因子を決定した。結果をTable 2に示す。各因子の解釈は以下ようになった。

第1因子は、「27.本質を見抜く力」「17.人を分析,判断できる力」「5.問題解決の際,適切な判断力を持ち,最良の方法を選べる判断力があること」などの項目から構成される。この因子は、一般的に直面した何かの問題や状況について、深く、広く、長期的な視点を立って考えることができ、その上に、適切な判断がきる能力を表すと考えられ、「問題解決力及び人物に対する判断分析力」と命名した。

第2因子は、「36.確たる意志を持つこと」「41.自分自身のポリシーを持つこと」「37.やっていいことといけないことを自分の倫理観の中でしっかり区別している」などの項目から構成される。この因子は、自分自身に対して自信を持ち、そして、自分の生き方や物事に対する強い意志を持つことを表す因子と考えられた。そこで、「自信及びポリシー」因子とした。

第3因子は、「50.柔軟的な対応ができる」「49.客

観的に物事を捉えられる」「66.多面的な解釈ができる」などの項目から構成される。そこで、物事の判断能力を表す第1因子に対して、この因子は物事について考える姿勢や態度を表す、ポジティブな姿勢と考えられ、「物事に対する客観的、柔軟的な姿勢」の因子とした。例えば、客観的、全面的に物事を考える習慣を持っている、つねに周囲に好奇心を持ち、熱心的であることなどが含まれている。

第4因子は、「33.自分の周囲に対していつも気配ること」「56.他人の意見をしっかり聞くこと」「20.優れたコミュニケーション能力」などの項目から構成される。この因子は、他人への気配りの気持ちを常に持っていること、及び「他人への配慮と他人とのコミュニケーション能力」の因子と命名した。

第5因子は、「42.目的のために、効果的な行動をたくさん考え出せること」「39.情報をうまく選択、利用すること」「29.発達の観点から、その人の年齢に対応したアドバイスができる」「12.知識を生活に応用すること」などの項目から構成される。「知識を日常生活に活用できる」の因子とした。

第6因子は、「19.リーダーシップ」「6.経験が豊富」「8.人を引き付ける力」などの項目から構成される。「リーダーシップ」因子とした。

第7因子は、「4.知識をたくさん持つこと。」「16.社会的知識の豊富さ」などの項目から構成される。「知識の豊富さ」因子とした。

各因子の信頼性係数を求めたところ、「問題解決力及び人物に対する判断分析力」因子が.86であり、「自信及びポリシー」因子が.81であり、「物事に対する客観的、柔軟的な対応力」因子が.85であり、「他人への配慮と他人とのコミュニケーション能力」因子が.85であり、「知識を日常生活に活用できる」因子が.78であり、「リーダーシップ」因子が.56であり、「知識の豊富さ」因子が.60であった。結果によって、第1因子から第5因子までのアルファ係数が高かった、信頼性があることが確かめられた。「リーダーシップ」因子及び「知識の豊富さ」因子がやや低いため、大学生における知恵のイメージに、重要性があまりないと考えられた。

考 察

(1) KJ法による知恵の分類と因子分析の結果との比較

大学生の知恵に対するイメージは、KJ法と因子分析によって分類された。それらの2つの分類法で分類した結果を比較したところ、次のような結果が示された。まず、KJ法で得られた「自己」や「他

者」カテゴリは因子分析で得られた第2因子の「ポリシー及び自信」因子、第4因子「他人への配慮と他人とのコミュニケーション能力」因子の内容と一致していた。第2に、KJ法による「問題解決」カテゴリには、さらに「問題解決能力」や「メタ認知」の2つのカテゴリに分けられ、その内容は調査2による第1因子の「問題解決力及び人物に対する判断分析力」因子、第3因子の「物事に対する客観的、柔軟的な姿勢」因子とは一致していた。第三に、KJ法による「柔軟性」と「メタ認知」の2つのカテゴリは、調査2の第3因子の「物事に対する客観的、柔軟的な姿勢」因子の内容と一致していた。

以上述べたような結果から見ると、大学生の知恵のイメージについて、「問題解決」と関連する項目は重要であることが示された。さらに、その内容を検討したところ、常識的なKJ分類法によって、それらの多くの「問題解決」と関連する項目はさらに問題解決の能力及びメタ認知の2つの下位概念に分けられるが、心理学的な方法で実施した結果には、この2つは共に重要性が高い、独立した項目に処理すべきだと思われる。また、「学習」「向上心」というものが知恵のひとつの重要な要素であると考えられるが、この項目は因子分析の結果に示されてなかった。以上の結果から、常識による一般的な共通した「知恵についてのイメージ」の結果は心理学の方法によって確認されたと思われる。

(2) 本研究における「暗黙の知恵観」と先行研究との比較

本研究から得られた7因子から、知恵は知識の活用、問題解決及び人物の分析と判断力などの、具体的な生活場面に応用する知的能力だと思われる。また、自分に自信を持つなどの性格面も知恵の欠かせないイメージの一部だと思われ、さらに、社会や他人との深く関わることによって、「知恵」を表すことができるとと思われる。ここでは Holliday & Chandler(1986)の研究による「社会的慎しさ、社会から離れている」の因子には、異なった結果が示されていた。その原因は、現在の人々の知恵観は10年前より現実的で、親しみやすい、人々の思った知恵は自分の経験から実証できることで、社会的に役に立つことだととらえられていることが考えられる。

また、Hollidayらの研究と比べる結果で、本研究の結果にはいくつかの特徴が示された。まず、「問題解決力及び人物に対する判断分析力」及び「他者への配慮と他人とのコミュニケーション能力」は、Hollidayの「経験に基づく優れた判断力」「日常の出来事処理についての判断力とコミュニケーション

Table 2 「知恵のイメージ」についての質問項目及び因子分析結果

番号	項目	I	II	III	IV	V	VI	VII
第一因子：問題解決力及び人物に対する判断分析力.								
27	本質を見抜く力.	.71	.16	.11	-.16	.04	.09	-.10
17	人を分析, 判断できる力.	.68	.06	.10	.01	.09	-.01	.23
18	物事の可能, 不可能を見抜くことができる.	.57	.19	-.07	.01	.28	.00	.31
7	問題発生の可能性を予測できること.	.54	-.04	.06	.18	.18	.24	.15
26	決断する前に, 広く, 深く考えること.	.52	.34	.15	-.01	.14	-.08	.21
43	目先の利益にとらわれず, 長期的な視点に立つこと.	.50	.31	.00	.22	.16	.11	.06
28	自分自身のことをよく理解できること.	.49	.31	.20	.13	.06	.07	-.04
13	他人の気持ちをよく理解する.	.48	.17	-.05	.18	.24	.24	-.20
52	常に物事を全体から眺め, 分析する.	.47	.25	.40	-.07	.06	.08	-.07
10	他人との議論を冷静かつ論理的に進める力.	.47	-.01	.13	.27	.15	.17	.19
62	相手の言いたいことを正確にくみとる.	.45	-.07	.43	.26	-.09	.17	.03
5	問題解決の際, 適切な判断力を持ち, 最良の方法を選べる判断力があること.	.42	-.19	.21	.05	.12	.03	-.10
38	物事の善悪について判断ができること.	.37	.34	-.06	.29	.09	-.28	-.02
第二因子：自信とポリシー								
35	確たる意志を持つこと.	.45	.74	.01	.12	-.05	-.04	.28
29	しっかりした信念と大望を持って生きていること.	.16	.70	.06	.10	.20	.09	.12
41	自分自身のポリシーを持つこと.	.11	.70	.03	.06	-.03	-.02	.27
36	自分に自信をもつこと.	.03	.61	.12	.20	-.07	.09	-.17
37	やっていいことといけなことを自分の倫理観の中でしっかり区別している.	.26	.52	.02	.35	.10	-.32	-.11
65	強い精神力.	.23	.48	.23	.08	-.11	.39	-.17
25	自分が何をして生きていくべきかを心得ていること.	.13	.39	.14	.11	.20	.06	.13
45	オリジナルな考え方.	.08	.33	.18	-.10	.27	.21	-.24
第三因子：物事に対する客観的, 柔軟的な姿勢								
60	頭の回転が早い, 理解が速い.	.15	-.11	.59	.04	.39	-.14	.17
50	冷静沉着で, 物事の先を読める.	.39	.20	.57	.04	.07	-.19	.08
55	幅広い分野の知識を得ようとし, 努力する, 学問に対して熱心であること.	.22	.20	.53	.30	-.04	-.15	.16
63	柔軟的な対応ができること.	.00	.03	.53	.14	.20	.04	-.21
49	客観的に物事を捉えられる.	.36	0.2	.52	.10	.01	-.02	.01
64	物事について敏感であること.	.03	.44	.51	.13	.06	.11	.01
51	機転が利く.	-.09	-.02	.51	.02	.30	.14	.01
57	バイオニア精神があること.	-.06	.29	.49	.08	.15	.18	.00
47	物事について, 合理的に体系化できる.	.31	.10	.46	.00	.12	.22	.31
66	多面的な解釈ができる.	.06	.21	.46	.02	.41	.09	.09
44	判断のtimingの適切さ, 判断の速さ.	.24	.00	.43	-.22	.20	.22	.23
48	常に自分を向上させようとすること.	.36	.35	.42	.28	-.17	.13	.13
第四因子：他人への配慮と他人とのコミュニケーション能力								
59	他者に対する配慮を心得ている.	.05	.25	.16	.72	.06	.16	.00
33	自分の周囲に対していつも気を配ること.	.14	.27	.02	.70	-.03	-.09	-.09
32	他人に迷惑をかけたり, 不快感を与えないで自己主張ができること.	.14	.23	.00	.63	.21	-.03	-.11
58	学習の仕方が上手.	-.09	-.12	.23	.50	.40	-.12	-.02
56	他人の意見をしっかり聞くこと.	.25	.05	.47	.49	-.19	.17	.08
54	常にプラス思考で物事を考えること.	-.04	.37	.17	.45	.01	.15	-.14
9	自分の考えをうまく相手に伝えること.	.35	-.08	-.04	.43	.24	.34	.13
20	優れたコミュニケーション能力.	.12	.15	-.01	.43	.22	.41	.12
第五因子：知識を日常生活に活用できる								
40	その時代の状況において, その状況にあった考えを選ぶことができる.	.18	.09	.08	.11	.57	-.09	.10
42	目的のために, 効果的な行動をたくさん考え出せること.	.09	-.07	.12	.13	.57	-.05	.13
39	情報をうまく選択, 利用できること.	.11	.03	.25	.07	.52	-.20	.02
23	発達の観点から, その人の年齢に対応したアドバイスができる.	.16	.08	.04	.28	.51	.16	-.07
31	物事を作り出す創造力.	-.04	.27	.20	-.05	.50	.20	-.23
15	多数の解決法を考え出す力.	.10	.04	.08	.07	.47	.12	.21
30	無駄なく, 要領よく生きていること.	-.28	-.06	.16	.23	.46	.02	.17
12	知識を生活に応用できること.	.12	-.08	-.05	-.13	.43	.10	-.01
21	ある一つの考えに固執しないこと.	.17	.20	.14	.12	.41	.25	-.25
61	いつも, よりうまくいく方法を考えていること.	-.02	.09	.32	-.14	.40	.09	.14
67	物質, 社会的に, 不利な立場にも生き抜く能力を持つこと.	.09	.00	-.05	.21	.38	.08	-.05
24	他者, 状況の分析力.	.20	.26	.08	-.05	.35	.14	.04
46	何か与えられた課題に対して, 自分の知識をフルに活用して処理できる.	.16	-.01	.28	-.05	.33	.02	.19
第六因子：リーダーシップ								
8	人を引き付ける力.	.09	.09	.14	.17	.01	.63	-.04
6	経験が豊富.	.13	-.06	.10	.03	.08	.41	.07
19	リーダーシップ.	.02	.17	-.12	-.04	.26	.40	.36
14	まわりの人をいつでも安心させられる力.	.11	.21	.00	.30	.06	.40	-.10
第七因子：知識の豊富さ								
4	知識をたくさん持つこと. 博識であること.	.09	.06	.19	.02	.09	-.10	.71
16	社会的知識の豊富さ.	.11	.03	.05	-.05	.10	.13	.47

ン能力」及び「対人技能」とは同じ内容のものだと思われる。しかし、2つの研究においては、コミュニケーションの能力は異なった位置付けであることが見られた。Hollidayの研究には、「コミュニケーションの能力」は「判断力」とは同じ項目とされていたのに対して、本研究には、「対人の配慮」とは同じ項目とされていた。本研究の「他者への配慮」の因子の項目から見ると、「自分の考えをうまく相手に伝えること」「他人の意見をしっかり聞くこと」などの項目が含む、すなわち、本研究によると、本因子は常に他人のために考えているの気持ちを持つだけではなく、いかに他人の考えや立場を正確に理解し、それをうまく伝えるなどの複雑なプロセスをこなさなければならないと思われる。その意味で、コミュニケーションの能力は日常生活の判断力との関係よりも、人のこころをうまくつかめる力が必要と思われ、「他人への配慮と他人とのコミュニケーション能力」因子とは深く関わっていると考えられる。

次に、Hollidayの「一般的なコンピテンス」因子には、注意深い、鋭敏さ、知能の優秀、創造的、教養があることなどの項目を含む。本研究の相当する因子は特になかった。この因子は幅広い知能の能力とその結果、原因を示しているのので、本研究には、似たような項目が各因子に散布していることが見られている。例えば、「鋭敏さ」項目は「物事について敏感であること」を示し、「客観的、柔軟的な姿勢」因子に含まれる。この因子は知恵よりも、基本的な知能を示しているのので、あまり重要ではないと思われる。

また、本研究の独自の因子は「客観的、柔軟的な姿勢」「自信とポリシー」の2つであった。まず、「客観的、柔軟的な姿勢」因子は、常に自分を向上させていることや、学問に熱心的であることなどの向上心、探究心を示す側面と、柔軟性、多面的に解釈できることなどの側面を含み、知恵者のメタ認知を示すと考えられる。この因子から、知恵者は知性が優れているだけではなく、特殊な認知パターンを持ち、知恵者たちの一致した性格傾向があることも考えられる。この結果によって、知恵者の認知スタイルや性格傾向をさらに検討する必要があると考えられる。

本研究の独自の「自信とポリシー」因子については、自信に溢れる、物事に対しては、一貫した考え方や価値を持っていることは人々の憧れる知恵者の特性とも考えられる。本研究は大学生を対象として「知恵者のイメージ」の記述を収集したが、大学生たちは自分に対してまだ十分に自信やポリシーを

持っている段階ではないため、大学生にとっては、自信やポリシーを持つことが重要である可能性がある。また、人生や社会の物事に対して、自分なりの価値観を持ち、ステレオタイプではなく、自分なりの考えに基づいて、物事に対応したり、人にアドバイスしたり、自分の道を進み、生きていく人は一般的にも知恵者だと思われる。この因子は常識的な考えとは一致していると考えられる。

本研究の7因子の中で、項目が少なく、重要性の低いと思われた2つの因子は「リーダーシップ」と「知識の豊富さ」因子であった。この結果から見ると、まず、知識をたくさん持つことが知恵の要素であり、しかも知恵のイメージに重要性の低いことが明らかにされた。また、リーダーシップ能力などを示した第6因子と「自信とポリシー」の第2因子をあわせてみると、本研究の回答者の大学生にとって、知恵者のイメージにカリスマ性が含まれることが明らかにされた。この結果はHollidayの「社会的慎重さ」因子とは違い、社会や人から離れるよりも、ポジティブに人を指導したり、主観な判断を下したりすることが知恵者だと思われる。また、Batesの「価値相対論」にも、主観的な判断を避け、絶対な客観性を強調する要素がある。これは西洋文化の特徴とも考えられる。それに対し、本研究では主観を認め、カリスマ性を持つことが知恵の要素として含まれるという結果が示された。

まとめ

本研究では、大学生が持っている知恵者に対するイメージについて検討してきた。その結果、問題解決及び人物の判断力、自信及びポリシー、柔軟かつ客観的な姿勢、他人への配慮やコミュニケーションの能力、知識の活用などは大学生にとって、知恵者の欠かせない要素であることが示された。

しかし、今研究の対象は大学生であり、大学生から見た知恵者のイメージに限られている。今後、異なった世代を対象にして、さらに暗黙の知恵観を調べることが必要だと思われる。

要約

本研究では、大学生の知恵に対するイメージを明らかにすることを目的とした。調査1では、135名の大学生から、「知恵者についてのイメージ」の自由記述が収集された。これらの項目をKJ法によって分類した。その結果、以下のような7つに分類された。1)知識と経験にかかわる項目。2)他者の配

慮にかかわる項目。3)自己にかかわる項目。4)問題解決能力にかかわる項目。5)向上心。6)学習。7)柔軟的に物事を考えることができることであった。調査2では、調査1で得られた項目によって質問紙を作成し、「次の文章はあなたの持つ『知恵』のイメージにどのくらい近いですか？」という教示について、とつても似ているの(1)から、全然似ていないの(5)までの5件法によって、回答を得た。因子分析を行ったところ、1)問題解決及び人物の判断力、2)自信及びポリシー、3)柔軟的かつ客観的な姿勢、4)他人への配慮やコミュニケーションの能力、5)知識の活用、6)リーダーシップ、7)知識の豊富さの7因子が抽出された。先行研究と比較したところ、本研究の結果には問題解決の判断力は知恵のイメージに中心だと思われ、自信及びポリシー及び柔軟的かつ客観的な姿勢などの項目は独自であった。また、将来異なった世代の暗黙の知恵観を調べることも必要であると思われる。

引用文献

- Baltes, P. B. & Smith, J. 1990 Wisdom-Related Knowledge: Age/Cohort Differences in Response to Life-Planning Problems. *Developmental Psychology*, **26**, (3), 494-505
- Birren, J. E. 1980 The Development of Wisdom across the Life Span: A Reexamination of an Ancient Topics. *Life-span Development and Behavior*, **3**, 104-132.
- Birren, J. E. & Schaie, K. W. 1990 *Handbook of the Psychology of aging*. 3rd ed san Diego. CA: Academic Press.
- Clayton, V. 1976 A multidimensional scaling analysis of the concept of wisdom. Unpublished, U of southern california.
- Holliday, S. G. & Chandler, M. J. 1986 *Wisdom: Explorations in adult competence*. Basel, Switzerland: Karger
- 中西信男 1995 英知の心理 ナカニシヤ出版
- 大川一郎 1989 高齢者の知的能力と非標準的な経験の関連について *教育心理研究*, **37**, 100-106.
- Sternberg, R. J. 1985 implicit theories of intelligence, creativities, and wisdom. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, (3), 607-627.
- 下仲順子 1998 老年心理学研究の歴史と研究動向 *教育心理学年報*, **37**, 129-142
- 高山 緑 1997 心理学的英知研究の流れ 東京大学大学院教育学研究科紀要, **37**, 185-194
- Taranto, M. A. 1989 Facets of wisdom: A Theoretical Synthesis. *Aging and Human development*, **29**, (1), 1-21.